

謹賀新年

リフレッシュ 滋賀

第3号

連合滋賀・高退協会報

発行責任者:吉村眞明

編集責任者:嶋澤順三

大津市松本2-10-6
電話:077-523-0500

小篠原大岩山銅鐸 (24個のうち19個)

銅鐸博物館 (野洲町立歴史民俗資料館) パンフレットより

平成十年戊寅元旦
連合滋賀・高退協役職員一同

古代を翔る新年の夢

滋賀県野洲町大字小篠原字大岩山から、明治一四年八月に一四個、それから八一年後の昭和三七年七月に一〇個、併せて二四個の銅鐸が出土しました。これだけの数の銅鐸が一ヶ所から出土したのは、平成八年一〇月に島根県加茂町岩倉の丘陵斜面で、三九個もの銅鐸が出土したのに次ぐものです。大岩山から出た銅鐸(レプリカ)は、野洲町の銅鐸博物館(町立歴史民俗資料館)に行けばいつでも見られます。また島根県の加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸については、昨年一月〜二月に大阪市立美術館で催された古代出雲文化展で展示されましたから見られた方も大勢おられると思います。

銅鐸は弥生時代の二〜三世紀頃に製造され、四世紀までにことごとく埋納されたといわれており、今日においても謎の多い古代銅器です。それだけに銅鐸をみておりますと、約二〇〇年昔の古代日本のありさまが、さまざまに思い描かれるのです。労働組合活動や高齢者対策に疲れた頭を、時には休めて、古代の日本人がなにを考え、どのような生活をしていたのか、に思いを巡らすのも、夢があつて悪くないと思います。

銅鐸の館彩る木の実かな
無玄子

下戸事務局長 新会長に選任さる 東郷会長勇退 常任顧問に就任

Ⅱ 連合滋賀第五回定期大会Ⅱ

一二月一二日、琵琶湖ホテルにおいて連合滋賀の第五回定期大会がひらかれ、高退協の三役(吉村会長、嶋澤、奥村両副会長、北村事務局長)は特別代議員として出席しました。

この大会で連合滋賀の初代会長であり、一九八九年以来四期八年その任にあつた東郷栄司さんが、出身会社の関



下戸新会長



前坂事務局長

西日電で六〇歳定年を迎えられたのを契機に勇退され、常任顧問に就任。後任会長に連合滋賀の事務局長であつた下戸薫さん(五三歳、電機連合出身)が選任されました。また連合滋賀の事務局長には電力総連の前坂雅春さん(四四歳)が選任され、新体制の下でこれからの連合滋賀は運営されることになりました。なお、高退協担当の副事務局長川上善弘さん(三八歳、情報労連出身)は留任されましたので、今後の高退協の運営には何ら支障なく、従来以上に頑張つて行こうと、一同決意を固めているところです。



人口減少時代のインパクト

Ⅱあらゆる社会福祉は崩壊するⅡ

嶋澤 順三

日本は過去「人口静止社会」の経験はあるにしても、特に明治以降は「人口増加社会」の中で、政治、経済、教育、文化等すべてを推進してきたのである。ところが、近年急速に少子・高齢化が進み、いよいよあと一〇年ほどで、「人口減少時代」へ突入する。日本は、かつて経験したことのない未知の社会を否応なく迎えることになるのである。国家のあらゆるシステムが、人口増加を前提にして設定している現状から、今度は人口減少を前提にしたシステムへ組替えなければならない。それも大急ぎで。

いま、殆どの会社で定年退職者が続出しており、その数も増加の一途を辿っている。私の出身のNECをみても例外ではない。そのため、労働組合のOB会（執行部経験者）も会社のOB会（役員及び管理職経験者）も新会員が年々ふえ続ける一方で、予想よりはるかに物故者は少ない。これらの定年退職者は、以前とはや、趣を異にし、再就職についてはあまり積極的ではなく、年金生活に入る者が多くなっている。それは、それだけ再就職先が狭くなりつ、あり、再就職してもあまり良い条件ではないことに加えて、子どもが親元を離れ、老夫婦二人の世帯が多くなり、厚生年金と企業年金を

併せて、月収約三〇万円もあって、老夫婦二人で充分生活できるからであろう。

でも、こんな長閑な生活パターンもあと何年続くのか。多くの労働組合では、年金受給年齢の引上げに備えて、定年年齢の引上げ（六〇歳定年から六五歳定年へ）要求を考えているようだが、長引く不況で体力が弱っている企業が急増している中で、定年年齢の引上げは容易なことではあるまい。また、企業年金も行きづまりつ、ある状況で、いつまで支給が保障されるのか、見通しは決して明るいものではない。

そんなことよりも、現在の年金生活者の健康が心配である。私も実感していることだが、六〇歳台と七〇歳台とでは、身体の調子が随分ちがうことである。六〇歳台では、自ら老人になったという実感は乏しい。だが、七〇歳台に入ると「としをとった」という自覚が強まってくる。いくら自分で「まだまだ若い」といい聞かせていても、さすがに身体の方は思うようには動いてくれない。この分では、八〇歳台に入ればどうなることかと、いさ、か心もとないが、八〇歳台の人に聞いてみると、徐々に衰えては行くものの、ほゞ七〇歳台の延長線上で推移するということだった。だが、精神的に、

あるいは肉体的になにかのショックをうけると、思いのほかダメージが強くて、それがあの世行きに直結するということがらしい。私の知人（京都在住）で、八〇歳台まで極めてお元気で、長命を祝福していたのだが、九〇歳の春、神戸大地震で精神的にショックを受け、体調を崩しチョットした風邪がもとで肺炎をおこし、九一歳の春亡くなった人がいる。住まいは京都なのだから、神戸大地震の直接の被害者ではない。けれども、九〇歳という高齢では、大地震による恐怖感はいほどのものだったのだろうと想像する。ショックは、人それぞれ、ケースバイケースなのだが、高齢者というのは、余人では理解できないことがショックになる。そしてそれがひきかえになって死に至ることになる。先日映画監督の伊丹十三が、唐突に自殺したが、まだ六四歳という若さではあるけれども、余人には理解できないことがショックとなって死んだのであろう。このような死に至るショックというのは、年をとるに従い強くなる。余人にとってはなんでもないようなことでも、当人にとっては大きな打撃となるので、油断はできない。

定年になって、遊んでいてはいけないという。人間は死ぬまで働き続けることが理想的であって、あまり早々に仕事をやめてしまい、遊んでいるとボケが早くくるといふ。あるいは身体が弱って、病気になる。寝たきり老人になる確率が高いともいふ、とにかく働き続けて、それ相応の収入があれば、年金不安も、低金利もあまり苦にならない。それ

で私自身も「生涯現役」を実践し、他人にも「生涯現役」をすすめている。しかし、「生涯現役」と一口にいうが、やってみれば仲々生易しいことではない。第一に大方のサラリーマンは定年の壁があるので、本人の意志にかかわらずリタイアさせられる。だから「生涯現役」をめざすには、早くにサラリーマン生活に見切りをつけ、自分の仕事をもたなければならぬ。その決心は殆どのサラリーマンにとってはムリというものである。そのほか、「生涯現役」の継続にはさまざまな条件があつて、これらの条件をすべてクリアすることは、ひじょうにむづかしい。昔、脱サラが流行ったことがある。甘言につられて、脱サラが続出したが、みているとその大方がサラリーマンに逆戻りしている。そんなことなら、はじめの会社に止まっていた方がよかったのである。脱サラの成功者は、おそらく一〇〇人に一人か二人ではなかったかと思う。

今度山一証券がつぶれて、七五〇〇人の従業員が失業者になった。まさに脱サラのチャンスである。と思うが、実態は殆どの者が再就職先がしでウロウロしている。そんなことなら、何故会社をつぶしたのか、といたい。山一証券の労働組合は一体なにをしていたのだろうか。大方の労働組合は企業内組合なのだから、とにかくにも企業の維持存続が最大の任務ではないのか。恐らく山一証券の労働組合は、会社のいいなりになる御用組合だったのだろう。それでは企業の維持存続はできない。会社がつぶれて、

山一証券の社長は泣きながら記者会見していたが、あの席に何故労働組合の幹部はいなかったのか。労使は対等である。それなら、山一証券の労働組合の幹部も、社長と同席して、共に泣くべきである。組合員を路頭に迷わせた責任は社長一人にあるのではなく、労働組合幹部も同罪である。いつから日本の労使関係は、労使対等でなくなったのか。

神戸大地震のあと、家を失った住民の大方は、仮設住宅に入居したが、すぐさま自分で自分の家を建てた人たちがいる。その多くは外国人だったようだ。こんなことからいろいろ調べてみると、多くの外国では、自分の家は自分で建てる、建てられることが常識になっているらしい。だから外国人は、イザという時は自分で家を建てるのだという。家を建てるだけではない。食物をつくる、あるいは衣類をつくることも、基本的に可能な人びとが、世界中にはたくさん存在することがわかった。しかし、元々日本でもそうだったのだ。人間の生活の基礎は衣食住である。人間が人間として生きて行くためには、衣食住は欠かせない。その衣食住が、自分の手で確保できないようでは、社会に適応して生きて行くことができない、ということになる。こんな当たりまえのことが、日本ではどうの昔に忘れられてしまったのである。小学校から中学校にかけて、義務教育過程では、衣食住の確保についての教育が不可欠であるのに、すべての戦後教育は、オールサラリーマン化をめざしており、肝心な人間としての教育は全く疎かにされてしま

ったのである。

サラリーマンの弱点は、生活のすべてを人手に委ねてしまうことである。自身ではなに一つできない。最近、万事便利になって、そのために非婚時代になり、男も女も結婚しなければならぬ必然性がなくなり、独身のまゝ、いつまでも生活が可能になったが、それは全く自立ということとは無縁の生活なのであつて、たとえば食料にしても、そのまゝ、たべられるものが、なんでもいつでも入手可能になったというだけのことである。こういう生活は、大地震にでも見舞われたら一瞬にして崩壊する。あるいは、会社がつぶれて失業者になり、カネがなくなつたら一日も生活できなくなる。

老人介護の問題は、こういう万事人手に委ねるしか生活できないサラリーマンの延長線上の問題である。つまりサラリーマン生活者が定年を迎え、老後心身が衰弱してきた場合、老人介護の問題は大きくクローズ・アップする。昨年くれー二月九日、介護保険法が成立したが、サラリーマン社会では当然のことである。けれども、いくらとしをとつても、自分の身の始末ぐらいは自分でつきたいものである。近ごろ恥の文化の衰退が問題とされているが、老後の身の始末がつけれないで、人手に頼らなければならぬのも、恥にはちがひなかるう。「生き恥は晒したくない」という日本人の矜持は大切にしたいものである。私は、戦後なにかと福祉ということが声高に叫ばれてきたが、社会福祉の向上は、弱者にとつてはまことに有難いことではあるけれど

も、反面、恥の文化を衰退せしめた元凶の一つではないかと疑っている。人間の尊厳、あるいは人間の自立ということ、社会福祉との因果関係について一考を要すると考えている。

人口増加の一途を辿る時代においては、社会福祉の向上は、まことに結構なスローガンであり、システムなのであるが、既に少子・高齢社会に突入した現段階において、更には近々、人口減少時代を迎えるという今日において、先ず見直されなければならない問題は、社会福祉のシステムである。私はいままで、選挙のたびに声高に社会福祉の向上と実施を叫ぶ立候補者をみていて、カネの成る木がどこにあるかを考えていた。どこかにカネの成る木が生えているのならよいが、結局は多数国民の拠出によるしか術がないのに、やたらと社会福祉の向上を叫ぶ立候補者に偽善の匂いをかぎとつていたのである。しかし、事態は急を告げている。このまゝ、進めば、あらゆる社会福祉システムは崩壊する。年金も健康保険も、将来に亘る維持保障は不可能である。その上更に大きな難問が控えている。それは、一億総サラリーマン時代の終焉である。二一世紀はもはや会社の時代ではない。戦前は国家の時代であった。そして、戦後は会社の時代であった。その会社の時代も二〇世紀と共に終わりを告げる。戦後、あらゆる学校教育はサラリーマンになるためのものであった。そのために、高校全入から大学乱立まで、「よい大学を出てよい会社に入る」ことを、すべての教師、すべての親と子はめ

ざしたのである。その結果、日本人はとごとくサラリーマンになった。サラリーマンだけが正業で、サラリーマンでない職業につく者はまるでおちこぼれのよう、異端者のように扱われた。山一証券の崩壊は、そんな会社の時代にピリオドを打つ弔鐘である。これからの教育は、人間としていかに大切なことはなにか、人間として一人一人が生きて行くためにはなにが必要か、が基本となるだろう。その上に職業専門教育がのつかるであろう。教育を受けた者は、自らの進路を考え、自らの進路をきり拓くことになるだろう。そして男も女も共に自立が最高の生きがいとなるだろう。会社もなくなるわけではないが、会社へ勤める者は、自立心の乏しい者、あるいは自立困難な者とみなされるだろう。労働組合も企業別から職業別へ再編され、それぞれの職業ごとの情報交換や生活支援、あるいは仕事のレベルアップや趣味サークルが主体となり、加盟は個人単位に変わるだろう。以上は社会全体がそういう方向に向かわざるを得ないという一つの予測である。そして未来社会を貫くものは、老若男女共生共働社会の実現である。このような未来社会においては、非婚化は益々進み、結婚という従来のパターンは崩れ、非婚女性の出産が社会的に認知され、社会的支援を受けることになるだろう。そうでなければ、少子化と人口減少にハードメをかけることはできない。その結果、社会的モラルも大きく変わるにちがいない。

新日本電気労働組合連合会

退任役職員の会「乙酉会」

◇名 称 乙酉（いつゆう）会

◇設 立 昭和五〇年一月一日

◇名称の由来

組合結成三〇周年を記念して、新日電労連の前身である日本電気大津労働組合が結成された昭和二〇年の干支「乙酉」に因む

◇設立趣旨（趣意書より抜粋）

『私たちは主義主張必ずしもみな同じであったわけではありませんし又組合に出た時期もそれぞれ異なりますが少なくとも信義と友愛を共通の基盤としてひたすら組合旗のもと団結を誓い、いささか組合員指導の責を負った者同志であります。そのえにしは浅からざるものあり、たとえ退任以後歩いた道はさまざまでありましょうとも、その縁はもつと大切にしていよいのではないかと思うのです。このような考えから、組合退



乙酉会20周年の集いで挨拶する嶋澤会長

任役職員の会を発足させることを発起いたしました。』

◇会の目的（規約より抜粋）

- 一、会員の親睦・協調
- 二、会員に対する支援
- 三、現役員との連携
- 四、新日本電気労働組合連合会に対する協力
- 五、労働問題についての研究
- 六、高齢社会への対応

◇会 長 嶋澤順三

◇会 員 数 七〇〇名

かつて労務担当であった会社幹部や或いは組合と縁浅からぬ関係者も特別会員として迎えている。

◇事 務 局

大津市晴嵐二一九一

新日本電気労働組合連合会内

◇活 動

乙酉会規約により運営。

年一回世話人会を開催し活動方針を決定。又毎月一回常任幹事連絡会（いわゆる執行委員会）を開いて会員の動静把握も含め会の運営在り方について意志疎通を図っている。

組合創立五〇周年（平成七年）に際しては、冊子「五〇年のあゆみ」及び「組合創立五十周年記念誌」の編纂を乙酉会が担当した。

◇会 報 「いつゆう」

昭和五〇年四月一日第一号を発行し、現在第二三八号既刊

編集後記

連合滋賀高退協のみなさん。新年あけましておめでとうございます。早々「リフレッシュ滋賀第三号」をお届けします。連合滋賀は昨年の定期大会で新役員を選出し、新たな決意を以て今後に臨みます。私たち高退協も連合滋賀と歩調を合わせて頑張ります。

さて日本の少子・高齢社会はいよいよ深刻化し、あと一〇年ほどで人口減少時代に突入します。これについて嶋澤副会長の見解を掲載しました。みなさんからの甲論乙駁を期待しています。諸事騒然の世紀末ですが、新年ぐらいいは夢を持ちたいもの。そこで大岩山出土の銅鐸の写真と銅鐸博物館の御了解を得て一面に掲載しました。銅鐸って一体なんに用いられたのでしょうか。どうかみなさんもお考え下さい。

”お知らせ”

●高退協第四回幹事会

一月二日 一〇時 つがやま荘

●高退協臨時総会

二月九日 一五時 つがやま荘

投稿歓迎！

会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。原稿は左記までご送付ください。

〒520-0807 大津市松本2丁目10-6
連合滋賀・高退協事務局

期 間

'97年10月1日～
'98年3月31日

(但し、12月31日～1月3日と休前日は除く)

(特) 情報多数、旅企画に相談承り中！

お申し込み
お問い合わせは

<滋賀県内・近畿圏内旅行業 8129号 全国旅行業協会>

ユニオントラベル滋賀(株)

TEL 077-521-0511

大津市松本2丁目10-6 連合福祉会館内



いい旅 お宿
いい湯

お一人様 1泊2食 (サービス料込・諸税別)

1室4名様以上でご利用の場合 9,800円

1室3名様でご利用の場合 10,800円

1室2名様でご利用の場合 11,800円

小学生の料金は、掲載料金の70%、3歳以上の幼児は50%または、実費を頂戴します。

ユニオン宿泊プラン